

三月十一日、午後二時四十六分。

あたしは、だらけたかっこうで居間でテレビを見ていた隣の部屋でばあちゃんが、ラジオを聴いていた。妹は、まだ学校から帰ってきていなかった。父も母も、それぞれの職場で仕事をしていた。

ズーンと床が響いたような気がした。それから、激しく横に揺れた。一瞬、視界がぐにやりとゆがんだような錯覚を起こした。

「市子！ 市子お！」

ばあちゃんが叫んだ。同時に、ガシャンと何かが落ちる音がした。あたしは、這うようにして、ばあちゃんの部屋に向かった。仏壇の前でうずくまっていたばあちゃんを何とか立たせて、廊下まで引張った。揺れは収まらない。ばあちゃんが、床にべったりと座り込んだ。でもここなら、上から落ちてくるものはないはず。あるのは天井と屋根だけだから。天井？ まさかまさか。家、大丈夫だろうか。左右に揺れながら、みしみしと壁が鳴った。どうしよう、外に出た方がいいのか。だけど、でも、足が動かなかった。何もできなかった。ばあちゃんは、あたしにしがみついた。あたしは、ばあちゃんにしがみついた。どれくらいあったろう。やっと揺れが収まった。家は壊れなかった。けれど、ついていたはずのテレビが真っ暗だった。いつ、テレビが途切れたのか、記憶はない。

家の中を確認した。台所の食器棚が倒れて、割れた食器が散乱していた。玄関の花瓶が落ちて、三和土に水がこぼれてスニーカーをぬらしていた。自分の部屋。本棚から飛び出した本が床に散らばっていた。そんな光景が目裏にずっと残って、順送りの写真のように、今も折りにふれてよみがえる。それでも、我が家は無事だった。窓ガラスも割れなかったし、瓦も落ちなかった。

三時過ぎに、未奈子が半泣き状態で帰ってきた。

電気も電話も通じない。ガスも止まっている。冷え切った部屋の中で、着ぶくれるほど服を着込み、三人で余震におびえながら過ごした一夜。あたりも真っ暗だった。

「母さんたち、大丈夫かな」

心細そうに未奈子がつぶやいた。

「会社の方が頑丈なんだから」

叱責するようにいった。そう信じるしか、ない。

ばあちゃんの部屋で、鍋に水を張って、仏壇のろうそく立てを入れた。余震で倒れても、火が消えるようにと。三人で固まって、パンとせんべいを食べた。ポットに残っていた少しぬるくなったお湯でお茶を入れた。そのぬくみがありがたかった。余震のたびに、未奈子は泣きそうになり、「お姉ちゃん！」と叫んだ。

「大丈夫だよ！ 本震よりでかい余震はないんだから」